

議事録 第8回 知的支援基盤会議

- 1 日時 平成28年7月15日(金)
- 2 会場 三条市役所 第二庁舎 301会議室
- 3 出席者 別紙のとおり
- 4 議事内容

事務局	(開会の案内)
市長	<p>日頃からスマートウェルネスにおける三条の取組に関し、御協力をいただき、感謝申し上げます。そのような状況にある中で、昨年度は会議を開催することができなかったこと、お詫び申し上げます。</p> <p>また、今年度においても何度か延期させていただき、結果として今日になったことについても改めてお詫び申し上げたいと思っております。</p> <p>三条市がスマートウェルネスを推進していくにあたっては、様々な試行錯誤をしながらやってきておりますが、明確な何かを見出している状況でないのが今の立ち位置でございます。</p> <p>ただ、議論ばかりを積み重ねてもしかたがなく、歩きたくなるまちに向けて、限られた財源の中で行動変容に促すことができないかとソフト面を中心に展開をしているところですが、一方でハード面の整備として今年の3月に「ステージえんがわ」を開設させていただき、これまで培ってきたソフト事業をできる限り集約していこう模索している段階です。</p> <p>これまでスマートウェルネス三条の市役所内での司令塔は福祉保健部に置いていた訳ですが、これから先のソフト事業の展開し、行動変容を促していくことを考えますと、福祉保健部では狭義の健康施策の枠から逃れることができませんので、この4月からスマートウェルネスの担当を市民部に変更しました。この市民部には生涯学習課もあり、担当となる地域経営課そのものが三条マルシェ等々、様々な市民と関わって仕掛けていくことをそもそも担当している部署であることから、市民部が適切であろうと言うことで、今回大幅な方針転換をしたところでございます。</p> <p>ただ、これまで積み重ねてきたスマートウェルネスの経過があり</p>

	<p>ますので、今日は先生方から私どもの今の立ち位置について御意見を聞かせていただき、新たな方向性について示唆をいただければと思っております。限られた時間の中ではありますが、実りのある会議になることを祈念し、冒頭の挨拶とさせていただきます。</p> <p>本日はよろしくお願いたします。(3:55)</p>
久野議長	<p>市長さん、ありがとうございました。</p> <p>それでは、アジェンダに基づき進めさせていただきます。</p> <p>先程、市長の挨拶にありましたように、1年半程度経過しており、この間様々な取組がされており、またハード整備も行われております。そのことも含め、事務局から説明をお願いします。</p>
事務局	<p>事務局（地域経営課）が資料「第8回スマートウエルネス三条推進会議」に基づき説明</p> <p>(26:00)</p>
久野議長	<p>説明、ありがとうございました。</p> <p>では、早速ですがディスカッションに入ります。</p> <p>今ほど、事務局から説明があったようにいくつか課題があると言うことで整理をしますと、高齢者の行動変容への効果的アプローチ方法、事業参加者への働きかけ、事業の連続性に関して議論したいと説明がありました。</p> <p>まず、中身に入る前に今の説明で質問があればお受けしますがいかがでしょうか。(27:15)</p>
村山委員	<p>平成24年度の調査によると、運動に関して7割が無関心層ということですが、その後に同じような調査はあったのでしょうか。</p>
事務局	<p>平成24年度の調査結果のみでございます。</p>
久野議長	<p>事務局から今までの取組と今後の方向性</p> <p>まず、資料の5ページに「歩くことに加え、社会的つながりが強い人ほど、健幸で長生きできる」と仮説を立てられましたが、ステージえんがわを含め様々な事業を打ち出すことで外出を促し、その仕掛けづくりとしてコミュニティという発想をお持ちなのかと思うのですが、この仮説に関して各委員から御意見をいただきたいと思っております。まずは村山委員から何かありますでしょうか。</p>

	(29:11)
村山委員	このことに関しては専門ではありませんが、最近の研究の中で人間的なつながりが深いほど、長生きするあるいは要介護になり難いというデータも出てきていると思いますので、久野先生の方からお話があればと思います。 (29 : 35)
久野議長	田中委員はいかがでしょうか。
田中委員	高齢者の7割が運動に無関心ということですが、「協会けんぽ」としましては現役世代の方々を対象にしております、その状況は高齢者と現役世代とでは多分同じ位と「無いのではないと思します。「週に2回、30分位運動しますか」と聞いても実施している人は少ない状況です。この健康に対する意識をいかに上げるかで変わってくると思いますので、そのためにはいかに健康が大事かということも周知することで効果が出てくるかもしれない。
久野議長	(31 : 07) 松原委員からはまちづくり、都市工学の観点から意見をいただきたいと思いますが、資料の6ページに「高齢者が外出するという行動を自然と起こすために、どのような仕掛けが有効か」とあります。今までも議論してきたことでもありますが、これに関して三条市も含め多くの自治体の事例を知っている中で分かってきたポイントなどがあれば御紹介いただきたいことが1点目としてあります。また、2点目としまして、資料の4ページにあるような実績やステージえんがわでの事業展開などにどのような感想を持たれたのかコメントをお願いしたいと思います。 (32:18)
松原委員	資料の6ページの高齢者の外出に関して私が感じているのは、欧米とは根本的な社会の仕組みが違う気がしています。ヨーロッパですと、どちらかという地域で自然とコミュニティづくりをするという価値観があると感じています。日本だとそれがないのでなかなか外に出にくい。ヨーロッパの方々には公園などで長い時間座って過ごすことが当たり前であるような光景を見ますが、そういった価値観が日本ではまだまだだと思いますので、日本だと出にくい。

	<p>資料5ページの「社会的つながりが強いほど、健幸で長生きできる」という仮説に関しては、4・5年前の国交省の調査によりますと、人をよく知っている方、知人、友人が多い方はよく出歩いているというデータがあります。結果的には歩くので健康につながる。そして体だけでなく心の方も健康になっていき、幸福度が高くなっていくだろうとっており、社会と上手く交わっていくことがポイントで、今日のテーマであるコミュニティがどう関わるかによって効果を増し、結果としてよく外出することにつながるのではと考えます。</p> <p>えんがわの事業にしろ、資料4ページの事業など様々な仕掛けがあるということは選択が広がりますので良いことだと思います。</p> <p>(34:48)</p>
久野議長	<p>ありがとうございました。</p> <p>私の方から議論を進めるうえで質問をさせていただきますが、えんがわを例にしたときに、三条小学校区をモデル地区として来ていただくことなのか、三条市全体を範囲として来ていただくのか。もし、市全体を範囲とするなら、移動距離もあるので工夫している事などがあるのか。</p> <p>(35 : 43)</p>
事務局	<p>今まではモデル地区である三条小学校区を主な対象範囲として取り組んできた中で、3月26日にステージえんがわがオープンしました。モデル地区は当然のこと、下田地区や栄地区なども含め、全市的に来ていただければと考えております。そこで、デマンド交通を外出支援策として実施していくこととしております。</p> <p>(36 : 30)</p>
久野議長	<p>ステージえんがわに来る人が増えつつある中で、実際に歩いて来ている人、車で来ている人の割合は感覚で構いませんのでどの程度でしょうか。</p>
事務局	<p>来訪者への個別調査は実施してはおりませんが、利用は近所の方が多く感じております。この施設には駐車場が用意されていません。近くで利用できる駐車場としては隣にある鍛冶道場の駐車場と市場の駐車場となります。大きなイベントのときであっても人が多く来ている割には満車になるということも無く、駐車台数も増えているとはあまり感じませんので、付近の方が歩いて来ていると考えております。(37 : 25)</p>

久野議長	次に、外出を促す仕掛けを今まで以上に展開してきていることをこの1年半更に進めて来られたと感じているところですが、一方でこれだけ事業をしていることはすごく大変なことだとは思いますが、ドイツのエアランゲンのように NPO や民間企業が主体となるようなことも必要ですが、日本の場合はそうはなっておらず、まず自治体がやっていくことが当然となっていて、そのあたりの企業の活用などの戦略とかがあれば、説明いただければと思います。(38:37)
事務局	参考資料として配布したイベントカレンダーは7月版ですが、9月までにはイベントカレンダーの全ての小間が埋まるように取組を進めてまいりたいと考えています。 その中には行政が主体となるものもあれば、それ以外の行事もあります。ステージえんがわについては、あらゆる活動の場として使っていただけますので、民間企業からも利用してもらいたいと思っております。 (39 : 06)
久野議長	具体的に NPO や民間への仕掛けとしてはどのような可能性がありますでしょうか。今までもいくつかあると思いますが、例えばスパイス研究所もその一つだと思いますし、それ以外に想定していることがあれば説明をお願いします。
事務局	(39 : 40) 資料 10 ページを御覧ください。例えば、うたごえ喫茶や65歳以上の劇団のように、NPO ではないものの、外部の組織に実施していただいているものもあり、この中でちゃぶ台返し選手権は地域おこし協力隊と行政が一緒になってやっている事例ですが、様々な実施主体により事業が展開されています。
久野議長	(40 : 20) ありがとうございました。 外出のきっかけという中で、無関心層の人たちは情報を取らないということが分かってきているので、情報を知らないと行動につながらない。そこでコミュニティを重視するという戦略は絶対必要だということで位置付け、やっていくということを強く感じました。(40 : 55) 実は、今日は青森から三条市に来まして、昨日は青森市と平内町

	<p>の2つで住民のインフルエンサーのような方たちにヒアリングを行ってきました。</p> <p>例えば、青森市は県内で言えば県庁所在地ですが東京から見ると地方都市。同じ地方都市ということでも青森市と平内町では全く地域コミュニティのあり方が違い、そこで活動している市民委員の考え方や雰囲気自体も違っていました。何が違うかという、平内町は完全に地縁型でみんな顔を知っている関係の中で住民を引っ張っていく。青森市の30万人の都市ですと地縁型での取組にはならない。(42:07)</p> <p>長野県は長寿県として有名ですが、その取組事例として出てくるのが健康補導員です。その方々が地域で情報を住民に届けて、それが長野県の医療費の低減や健康長寿につながり、すごくうまくいっていると聞いているところですが、長野市ではその委員の活動が崩壊している。それは長野市でかつてはあったコミュニティが都市型となったことで活動が成立しなくなったと思われま</p> <p>す。</p> <p>(43 : 05)</p> <p>そこで、この三条で地域のコミュニティでやっていこうという今後の戦略において地縁型で攻めていけるのか、三条小学校区はまちなかなので都市型の部分もあろうかと思うので、その辺の分析や発想など何かお考えでしょうか。</p> <p>(43 : 25)</p>
事務局	<p>中心市街地にありましては、地縁によるつながりが残っており例えば自治会長や民生委員を通じたつながりは市街地においてもあります。(43 : 52)</p> <p>また、市やNPOなどで仕掛けているのはテーマ型コミュニティの創出で、テーマ型コミュニティを多く作り出すことで地縁型コミュニティを補完していけるよう取組んでいこうと考えております。</p> <p>こういった取組に関しては、地域の顔の見える関係があるから誘われると出やすいという状況があることを重要視しており、その関係を通じて取組んでいくこととしております。(44 : 25)</p>
市長	<p>少し補足させてください。</p> <p>今のステージえんがわを中心にしたソフト事業の創出は資料8</p>

ページにあるように、行政かNPOかという切り口でいうと、ちよūdの中間領域にあると思っていて、地域コーディネーターが全体をコーディネートしていく感じになっています。

また、9ページにある市民インタビュー、市民70人については地域再生マネージャーの近藤ナオさんが実施しました。彼は東京で活動していて、シブヤ大学という様々な分野を組み合わせてコミュニティ型の開かれた生涯学習講座などを展開しています。この資料にある調査ですがアンケートとあるものの、実は一人当たり2時間かけて行われています。その調査を通じて実態を把握するとともに、久野先生がおっしゃったインフルエンサー探しもしました。そのとき見つけた人とつながりつつ今展開をしているところδす。ここにあるように男性、女性それぞれ興味、関心が高い欲求が違ったりとしていますが、そのような中で彼が生み出した劇団の活動があります。それも企画したのが65歳以上の劇団。その活動の輪を少しずつ広げていこうと今まさに過渡期であって、中間領域だと。

もう一方できかけの1歩事業があり、無関心の人を健康一本でやったとしても梃子でも動きませんから、いろんな面から仕掛けていく必要があるけど、何を仕掛けていくかというと、近藤ナオさんの調査から高齢者は色んなことに興味があって琴線に引かかるものが何かしらあるから、特別に大きなことをやるのではなく、小さな取組を一つ一つ展開していくことが、いつの間にかズルズルと資料の5ページにある矢印の方向になっていき、最初は参加、継続、ボランティア体験くらいまでをきかけの1歩事業で取組んど。

この事業を実施する思いとしては、スマートウエルネスシティ首長研究会のときにコミュニティと都市計画をつなげるジェイコブズの紹介がありましたが、人との触れ合い

(49:30)

今回のステージえんがわの発想の観点もそうなのですが、建物の中δ閉鎖されている空間だと外からは何が行われているか分からないし、人の動きを感じるδできない。それがステージえんがわでは、透かし通し見えるので、なんとなく賑わっているね、楽しいそうだねと感じてもらえる。公民館事業はみんな一生懸命やっているのですが、部屋の中でやっているから見えない。そこ

	<p>で、できるだけステージえんがわに持って行きつつ、公民館事業という知り合いだけが集まって仲良くなっている、参加し難いという感覚を打破するために公民館事業という位置付けというよりは、名称も違うきっかけの1歩事業という事実上の公民館活動の延長線上なんだけど、よりオープンで、よりフラットで実施しているのがソフト事業の実情です。</p> <p>きっかけの1歩事業についての概要は担当から説明をします。</p>
出席者 生涯学習課	<p>50 : 50</p> <p>きっかけの1歩事業の概要について御説明させていただきます。平成27年度から重点事業として取組を開始し、今ほど市長からお話があったとおり、これまでの公民館事業はコアな公民館利用者しか来ていただけない状況がある中、そうではなく公民館を利用したことが無い方々に来ていただきたいということで、4つの視点があります。</p> <p>1つ目は突拍子もない事業をする。2つ目は参加費無料。3つ目は数多く実施する、平成27年度は27事業以上、今年度は54事業以上に取組んでおります。</p> <p>4つ目は行事終了後にお茶会・交流会をすることです。このお茶会には職員も参加し、参加者と交流することで次のステージに進んでいただける方をスカウトしています。こういった取組を昨年度から実施しております。(51 : 46)</p>
出席者 福祉課	<p>近藤ナオさんの取組に関しては、平成27年度からふるさと財団の補助を受けて、ステージえんがわを中心とした事業運営や活動に関して企画や調査を実施してもらいました。</p> <p>100人インタビューということで私たちが気付いていない人材を掘り起すなどして、地域コーディネーターの方もそうですが、三条に住んでいる私たちが気付かない魅力なり、様々な経験をお持ちの方も見つけてもらい、その掘り起こしていただいた方に今年度えんがわで事業を実施してもらったり、えんがわ以外でも事業をしていらっしゃる方もおりますが、インタビューを通じて人材の掘り起し、人々は何を望んでいるのかを調査することで今の事業につながっております。</p> <p>(53 : 27)</p>
久野議長	<p>今の話を聞きますと、しっかりとマーケティングを行い、市民のニーズを掘り起こした中で計画を立てていると感じました。今ま</p>

での行政側の勝手な感覚ではなく、かなり丁寧に聞き取りをしている事業を実施しているのが特徴と思われます。

ただ、どの程度行動変容につながっているかということですが、全国の自治体中でも稀な取組ですので、その関係性がしっかりと把握できれば今後の示唆が得られると思われま。

今の話を聞いて、最近のエビデンスや我々の経験から思ったことは、今実施している事業は直接的アプローチに分類されると思います。つまり、ニーズあった人に直接という形。もう一方で間接的アプローチがあります。

三条市はこれまでと違い、相当ニーズ把握をしてから実施しているので、直接届いていると思いますが、それでもなおそこに反応しない人がいる。情報にタッチしようとしな無関心層がまいると思いますので、その無関心層に情報を届ける間接的アプローチというのが、三条市のもう一つの柱のコミュニティからの情報伝達する仕組みだと思ひます。そこが組み合わせられていくと、商品販売のようにある一定数に達するとそこから爆発的に売れるという状況のように、その仕掛けとしてコミュニティによる間接的な伝達がマッチしてくるとそのようなことが起こるのかもしれないと思ひながら三条市の取組状況を聞かせていただきました。

そこで、参考になる話として間接的アプローチにより人が動くには最低4回以上情報を伝える必要があり、それも同じ人からよりいろんなところから、違う人から聞くとそろそろ私もと考えるようです。その4回の期間は、

56 : 55

短期間より1年をかけてじわじわと何度も聞くことが重要。コミュニティでの情報伝達を考えるとよいと思ひ。

久野：事業の連続性、ある特定の人達で続けていることに関してアドバイスはあるか。

村山：継続することも重要。だが、いかにそれを広げていくためには、継続しているグループの参考になるところを、次のグループにどう活かせるかがポイントかと思ひ。コミュニティを広げていく時に間接的アプローチが重要とあったが、それが有効だと思ひ。地縁のつながりとトピックス的に取り組みがあるが、新潟市はトピックス的な活動が良く出てきている。例えば子ども食堂の

取組があるが、これは市民が本当にやりたくてやっているものであり、年間で 11 か所もやっていることから、やりたい事はやるのだという印象である。地縁は自治会の了解を得なければならない難しさがある。三条市は新潟市より地縁が強い印象があるが、例えば自治会で 1 回体験してみるとか、話を聞くだけでなくコミュニティ単位で実感する機会を持つことも有効なのではないか。田中：事業の連続性、参加者が増えるのであれば有効だと思うが、増えない事業であればある程度整理をつける必要もあるのではないか。

松原：コミュニティをどう考えるか。色々な事業をしていて、ターゲットは高齢者とあるが、高齢者だけだと限界があるのではないか。例えば電車の中で赤ちゃんがいると皆が笑顔になる。先ほど、子ども食堂にしても、今まで興味が無かった人も入ってくることもあるんじゃないか。コミュニティは色々な年代があるものなので、あまり限定しない方が色々なバリエーションがあって出易くなるし、継続していくのではないかと思う。

村山：子ども食堂では独居の高齢者が喜んで出てくる。子どもに箸の持ち方を教えることを楽しんでいる。母親は子育てのストレスを少し解消できたりする。高齢者をターゲットにすることにの限界に同意である。

松原：エアランゲンの NPO は色々な年代の人が混ざっていて、ひとつの NPO でなく複数に所属している人が多く、シンプルでなく重層的であるために、強いコミュニティができています。継続性については、イベント事を多く行うと疲弊する傾向にある。自治体は民間イベントとのつながりが少ないため、地域プラットフォームをつくる方法がある。ひとつの事業にひとつの効果でなく、複数につなぐ相乗効果を狙いたいもの。えんがわでそれができていくと良いと思う。

市長：老若男女を取り入れることについて、なるほどと思った。なぜステージえんがわが高齢者に偏っているかというと、お洒落な空間であり、スパイス研究所が尖っていて若者向けである。今の段階では、思いっきり高齢者に振っていた。言われて見れば、多様な年代を取り入れたほうが拡がりがあると思う。

久野：NPO は民間であるべき。自治体が行うとお金をずっと出し続けなければならない。運営主体について、インセンティブが得られて続けていけるようにしていくことが大事だと感じた。

